



幕末期における江戸と大阪の物価 : 個別商品価格を中心にして

新保, 博

(Citation)

国民経済雑誌, 153(3):1-20

(Issue Date)

1986-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00173543>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00173543>



幕末期における江戸と大阪の物価

——個別商品価格を中心にして——

新 保 博

は じ め に

本稿は、すでに発表した拙稿「幕末期における江戸の物価水準——大阪との比較において——」¹および「幕末期における江戸と大阪の物価水準——農林産物価格・工産物価格・農工間相対価格をめぐって——」²の続篇をなすものである³。これら二つの論稿は、一般物価・米価・農林産物価格・工産物価格・農工間相対価格を中心に江戸・大阪の物価水準の比較をこころみたものであるが、そこで得られた観察事実のうち、本稿に関連するものとしては、次のような点があげられる。

(1) 一般物価・米価・農林産物価格・工産物価格のいずれにおいても、江戸の水準が大阪の水準を上まわっている。

(2) 工産物価格は農林産物価格にくらべて変動が小さいが、江戸・大阪両地間の開差は逆に工産物価格のほうが大きい。そして、大阪／江戸比の動きについては、工産物価格よりも農林産物価格のほうが安定的である。

(3) 大阪／江戸比の長期的趨勢は、いずれの場合にも、1845年前後をさかいにして転換をしめしているが、その内容はかならずしも同じではない。

(4) 1840年代・50年代には、江戸・大阪ともに物価の大きな変動を経験して

1 『国民経済雑誌』145巻5号、昭和57年5月。

2 『国民経済雑誌』145巻6号、昭和57年6月。

3 本稿は前稿に引き続き発表される予定であったが、筆者のまったく私的な事情によって今日まで発表が遅れた。その間に筆者が発表した物価史関係の論稿としては、「江戸末期（文政～幕末・維新）における物価動向と経済発展」（原田敏丸・宮本又郎編『歴史のなかの物価』昭和60年）がある。

いるが、その振幅は大阪のほうが大きく、大阪物価の市況に対する感応度の高さと、江戸物価の下方硬直的傾向が見出される。この傾向は、工産物価格において、とくに顕著である。

本稿は、以上の観察事実が個別商品価格についても妥当するか否か、を検討することを目的としている。この問題の検討のために、白米・大麦・大豆・繰綿・蠟・種油・黒砂糖・味噌・醤油・清酒という10種の個別商品の価格について、江戸と大阪の系列および大阪／江戸比の系列が用意されている。それらは、表1・表2・表3に示めされている。これらの表を中心に、個別商品価格の動向について検討をすすめていくことにしたい。なお、これらの物価系列作成のための資料や手続については、すでに前稿において詳しく述べているので、ここでは説明を省略する。

I 農林産物（白米・大麦・大豆・繰綿・蠟）価格の動向

ここでとり上げる農林産物は、白米・大麦・大豆・繰綿・蠟という5種の商品から成っているが、前3者は食糧農産物であり、残りは工業原料農産物と林産物である。以下、これらの個別商品の価格の動向を、表1・表2・表4および図1～5にしたがって検討しよう。

(a) 白米

江戸の米価系列としてわれわれが利用できるものは、東京廻米問屋組合『東京廻米問屋組合五十年史』（昭和12年）の「米価表」と、三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』（昭和27年）の白米価格の系列であるが、前稿で述べた理由により、ここでは後者を採用するとともに、その京都系列を大阪系列のダミーとして用いることにした。しかし、白米価格のみならず、この資料における諸物価の京都系列は、1860年代に関するかぎり、大阪の諸物価系列と整合的でない異常な騰貴をしめしている。したがって、1860年代における大阪（京

4 拙稿「幕末期における江戸の物価水準」4—5ページ。

5 拙稿「幕末期における江戸の物価水準」12—17ページ。

表1 白米・大麦・大豆価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)

年次	白米			大麦			大豆		
	江戸	大阪	阪/江	江戸	大阪	阪/江	江戸	大阪	阪/江
1832 (天保3年)	111.0	112.2	101.1	84.8	85.2	100.5	96.9	85.0	87.7
33 (4)	116.6	111.7	95.8	95.3	96.5	100.7	106.4	86.4	81.2
34 (5)	133.1	117.8	88.5	146.9	147.0	100.1	111.3	91.4	82.1
35 (6)	165.4	139.7	84.5	232.6	233.0	100.2	110.0	104.6	95.1
36 (7)	175.8	143.2	81.5	304.0	304.6	100.2	117.9	113.5	96.3
37 (8)	174.7	142.5	81.6	330.1	330.7	100.2	128.7	120.3	93.5
38 (9)	170.1	140.8	82.8	333.9	334.3	100.2	122.6	127.3	103.8
39 (10)	154.1	131.7	85.5	287.2	289.0	100.6	124.8	128.2	102.7
40 (11)	123.2	110.1	89.4	203.2	204.6	100.7	120.6	115.6	95.9
41 (12)	107.3	100.3	93.5	129.3	130.5	100.9	110.7	105.2	95.0
42 (13)	100.0	94.6	94.6	100.0	101.1	101.1	100.0	98.6	98.6
43 (14)	104.6	98.8	94.5	86.1	87.5	101.6	99.5	93.7	94.2
44 (弘化1)	110.4	103.3	93.6	93.0	93.5	100.5	96.0	91.9	95.7
45 (2)	114.2	105.3	92.2	101.9	102.7	100.8	100.7	93.2	92.6
46 (3)	115.1	110.0	95.6	111.2	112.2	100.9	102.8	95.3	92.7
47 (4)	116.0	114.5	98.7	127.0	128.0	100.8	107.5	100.1	93.1
48 (嘉永1)	121.2	123.8	102.1	159.6	160.3	100.4	116.9	110.4	94.4
49 (2)	123.7	131.6	106.4	179.8	180.3	100.3	121.7	113.7	93.4
50 (3)	123.5	132.3	107.1	186.3	186.5	100.1	120.2	117.2	97.5
51 (4)	130.0	134.4	103.4	180.8	180.6	99.9	128.8	122.8	95.3
52 (5)	132.5	134.7	101.7	168.4	167.8	99.6	131.6	125.1	95.1
53 (6)	124.0	123.8	99.8	138.3	137.3	99.3	124.2	121.5	97.8
54 (安政1)	116.2	111.9	96.3	119.4	118.2	99.0	117.6	117.1	99.7
55 (2)	115.8	111.0	95.9	113.1	112.1	99.1	111.0	112.2	101.1
56 (3)	116.3	114.2	98.2	124.4	123.6	99.4	100.5	106.2	106.0
57 (4)	119.4	117.1	98.1	135.6	137.8	101.6	98.7	105.3	106.7
58 (5)	128.9	126.3	98.0	161.0	163.2	101.4	114.7	123.0	107.2
59 (6)	145.9	151.4	103.8	170.1	172.6	101.5	139.8	143.2	102.4
60 (万延1)	149.8	160.9	107.4	186.1	186.1	100.0	157.2	158.0	100.5
61 (文久1)	148.7	165.2	111.1	195.2	195.7	100.3	162.3	171.1	105.4
62 (2)	146.9	175.0	119.1	212.8	209.5	98.4	181.3	184.9	102.0
63 (3)	160.5	206.0	128.3	229.7	228.3	99.4	196.3	192.4	98.0
64 (元治1)	195.1	295.7	151.6	265.3	263.1	99.2	238.7	232.2	97.3
65 (慶応1)	252.4	405.7	160.7	312.8	332.5	106.3	307.5	278.7	90.6

表2 繰綿・蠟・種油・黒砂糖価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)

年次	繰 綿			蠟			種 油			黒 砂 糖		
	江戸	大阪	阪/江	江戸	大阪	阪/江	江戸	大阪	阪/江	江戸	大阪	阪/江
1832	99.9	76.7	76.7	68.1	59.7	87.7	78.1	66.2	84.8	95.8	85.3	89.0
33	104.1	74.2	71.3	70.4	60.9	86.5	81.6	71.0	87.0	99.6	89.5	89.9
34	107.7	80.7	74.9	72.8	62.2	85.4	90.9	77.7	85.5	102.3	92.3	90.2
35	118.0	92.3	78.2	73.0	62.7	85.9	97.2	85.4	87.9	110.5	100.5	91.0
36	120.9	100.7	83.3	78.0	70.7	90.6	101.6	89.8	88.4	117.2	107.8	92.0
37	122.8	109.1	88.8	90.0	82.3	91.4	101.2	91.5	90.4	124.8	112.3	90.0
38	117.2	110.4	94.2	100.1	90.1	90.0	111.4	95.7	85.6	122.2	109.2	89.4
39	109.5	104.0	95.0	108.8	97.7	89.8	109.6	95.9	87.5	121.0	104.0	86.0
40	101.3	94.5	93.3	110.8	101.2	91.3	107.1	91.0	85.0	113.6	93.4	82.2
41	100.5	86.8	86.4	107.5	95.2	88.6	101.6	86.8	85.4	107.7	83.0	77.1
42	100.0	82.4	82.4	100.0	85.1	85.1	100.0	82.1	82.1	100.0	77.6	77.6
43	107.2	85.7	79.9	93.6	78.1	83.4	89.4	78.2	87.5	103.6	79.6	76.8
44	115.4	86.5	75.0	85.5	71.3	83.4	90.0	79.1	87.9	106.2	83.7	78.8
45	119.6	86.7	72.5	83.6	68.5	81.9	90.7	84.5	93.2	106.2	84.5	79.6
46	119.8	87.2	72.8	88.9	67.9	76.4	99.9	91.4	91.5	102.6	83.5	81.4
47	119.7	87.0	72.9	86.0	68.0	79.1	104.6	96.1	91.9	101.6	82.2	80.9
48	115.7	87.3	75.5	85.0	69.9	82.2	106.1	97.1	91.5	102.4	82.3	80.4
49	110.2	88.8	80.6	87.6	72.2	82.4	105.1	96.4	91.7	95.6	83.4	87.2
50	105.7	90.6	85.7	94.7	74.7	78.9	104.0	94.4	90.8	98.8	86.1	87.1
51	102.4	90.2	88.1	92.1	76.6	83.2	104.2	94.6	90.8	100.7	91.3	90.7
52	97.7	87.6	89.7	94.2	77.8	82.6	105.8	96.1	90.8	101.6	91.1	89.7
53	90.1	81.0	89.9	93.5	76.4	81.7	106.1	96.5	91.0	99.8	87.1	87.3
54	81.5	74.5	91.4	88.5	74.2	83.8	105.5	95.6	90.6	104.4	86.2	82.6
55	77.9	73.3	94.1	83.4	71.5	85.7	104.8	94.1	89.8	102.3	86.7	83.8
56	79.6	70.3	88.3	80.0	68.6	85.8	103.7	91.3	88.0	98.9	80.0	80.9
57	82.0	71.9	87.6	89.0	71.9	80.8	100.7	88.5	88.5	98.7	78.9	79.9
58	94.1	79.7	84.7	105.5	79.3	75.2	106.5	93.6	87.9	100.8	85.1	84.4
59	106.6	88.1	82.6	118.3	89.3	75.5	113.7	102.7	90.3	107.8	91.7	85.1
60	111.5	91.9	82.4	130.9	96.9	74.0	120.8	109.3	90.5	111.7	93.2	83.4
61	112.9	96.7	85.7	141.9	106.7	75.2	130.6	119.0	91.1	119.2	100.7	84.5
62	134.2	115.0	85.7	141.1	115.0	81.5	152.2	140.7	92.4	130.9	118.5	90.5
63	159.1	138.2	86.9	140.5	126.6	90.1	168.7	159.6	94.6	146.0	137.8	94.4
64	209.8	174.2	83.0	165.8	141.7	85.5	193.3	177.7	91.9	160.4	155.0	96.6
65	263.4	223.0	84.7	198.5	155.6	78.4	232.1	207.3	89.3	189.5	190.3	100.4

表3 味噌・醤油・清酒価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)

年次	味噌			醤油			清酒		
	江戸	大阪	阪/江	江戸	大阪	阪/江	江戸	大阪	阪/江
1832	72.5	106.6	147.0	78.1	83.3	106.7	92.5	79.6	86.1
33	76.2	107.5	141.1	80.0	85.1	106.4	97.7	79.3	81.2
34	83.5	109.9	131.6	82.5	86.5	104.8	103.2	79.4	76.9
35	93.9	127.3	135.6	90.0	91.5	101.7	124.3	90.7	73.0
36	104.4	135.2	129.5	99.0	97.8	98.8	141.0	98.0	69.5
37	112.3	141.5	126.0	107.0	104.4	97.6	146.6	106.5	72.6
38	117.7	144.7	122.9	110.2	109.0	98.9	146.7	107.3	73.1
39	117.8	141.7	120.3	113.3	113.0	99.7	144.8	105.1	72.6
40	112.8	125.0	110.8	109.5	109.6	100.1	124.8	93.4	74.8
41	105.8	115.5	109.2	104.1	102.9	98.8	106.6	84.4	79.2
42	100.0	108.7	108.7	100.0	94.5	94.5	100.0	70.4	70.4
43	96.1	106.9	111.2	100.5	88.3	87.9	104.5	69.7	66.7
44	93.5	107.9	115.4	100.4	81.6	81.3	108.5	71.1	65.5
45	92.9	112.1	120.7	101.6	77.7	76.5	115.8	72.9	63.0
46	93.3	117.0	125.4	102.8	75.6	73.5	124.9	75.6	60.5
47	94.7	124.2	131.2	104.3	77.3	74.1	131.5	80.5	61.2
48	98.6	127.7	129.5	106.7	79.4	74.4	131.2	85.1	64.9
49	102.4	139.3	136.0	109.2	82.5	75.5	137.1	94.7	69.1
50	106.0	132.9	125.4	110.5	82.9	75.0	141.2	94.3	66.8
51	109.2	132.6	121.4	111.4	83.9	75.3	143.1	94.1	63.6
52	110.6	130.6	117.7	111.5	82.9	74.3	144.3	93.1	64.5
53	107.3	127.5	118.5	108.7	81.4	74.9	145.1	88.9	61.3
54	105.0	121.8	116.0	106.1	78.8	74.3	141.2	77.4	54.8
55	102.5	122.8	119.8	104.5	80.1	76.7	137.8	76.4	55.4
56	100.8	121.8	120.8	104.4	80.5	77.1	135.5	78.6	58.0
57	99.2	120.4	121.4	104.2	81.7	78.4	133.9	81.1	60.6
58	102.7	129.8	126.4	106.2	84.4	79.5	136.3	84.5	62.0
59	111.0	153.1	137.9	111.5	97.3	87.3	140.8	95.7	68.0
60	117.2	169.7	144.8	116.2	105.1	90.4	144.6	100.5	69.5
61	122.1	197.3	161.6	124.5	114.3	91.8	149.5	103.4	69.2
62	128.4	222.6	173.4	133.9	125.7	93.9	154.3	108.5	70.3
63	141.9	247.5	174.4	149.1	149.6	100.3	172.8	129.3	74.8
64	159.8	324.8	203.3	160.9	173.5	107.8	202.5	165.2	81.6
65	195.5	424.6	217.2	181.9	230.3	126.6	251.5	235.7	93.7

表 4 農林産物価格の期間平均・期間変動係数

(指数, 1840—44年 江戸=100)

	期 間	平 均			変 動 係 数	
		江 戸	大 阪	阪/江	江 戸	大 阪
白 米	1830—43	126.3	117.6	93.1	33.0	26.1
	44—57	119.7	118.0	98.6	12.5	14.8
	30—57	123.0	117.8	95.8	25.6	21.2
	58—67	201.1	283.3	140.9	49.7	73.2
大 麦	1830—43	177.7	178.5	100.5	78.2	77.9
	44—57	137.9	137.9	100.0	36.0	36.1
	30—57	157.8	158.2	100.3	67.3	67.3
	58—67	249.4	259.3	104.0	35.8	43.0
大 豆	1830—43	110.1	102.4	93.0	18.3	23.0
	44—57	112.1	108.9	97.1	16.3	14.1
	30—57	111.1	105.7	95.1	17.3	19.1
	58—67	232.4	218.3	93.9	57.1	45.3
緑 綿	1830—43	107.4	89.3	83.1	14.5	21.6
	44—57	101.0	82.5	81.7	20.4	13.4
	30—57	104.2	85.9	82.4	17.8	18.7
	58—67	187.5	157.5	84.0	57.2	54.8
蠟	1830—43	85.6	76.2	89.1	25.3	26.7
	44—57	87.5	71.5	81.7	12.4	7.0
	30—57	86.6	73.8	85.2	19.9	20.3
	58—67	164.7	126.2	76.6	38.8	29.8

図 1 江戸・大阪における白米価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5 カ年移動平均)

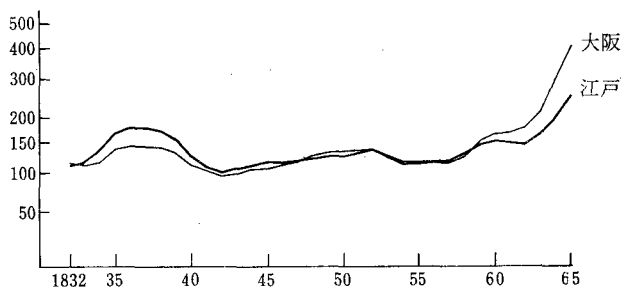


図2 江戸・大阪における大豆価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)

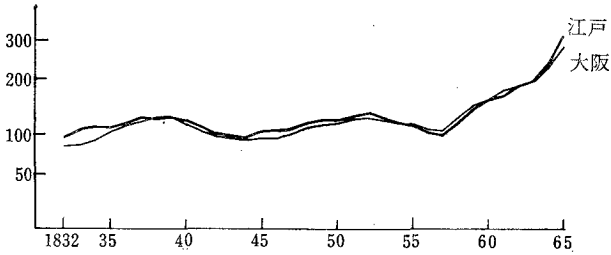


図3 江戸・大阪における繰綿価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)

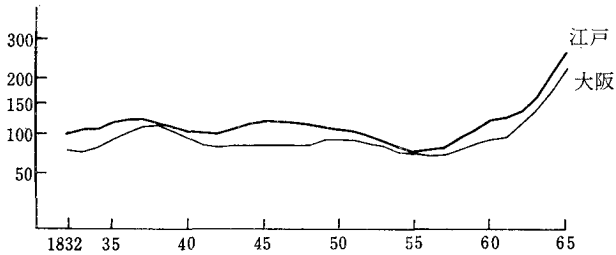


図4 白米・大麦・大豆・繰綿価格における大阪／江戸比の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)

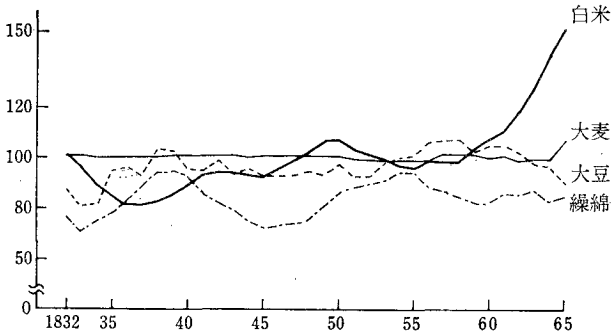
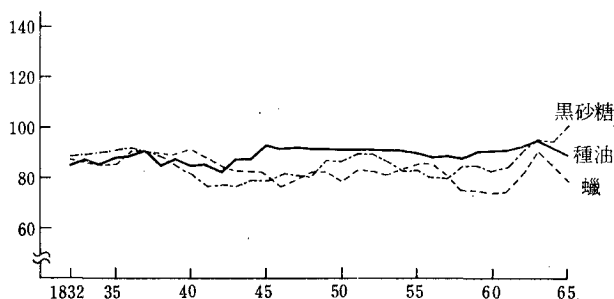


図5 蠟・種油・黒砂糖価格における大阪／江戸比の動向

(指数, 1840-44年 江戸=100, 5カ年移動平均)



都)の白米価格については、利用を留保しなければならない。

米価についてはすでに前稿で検討済みであるから、ここでは表1およびそれをグラフ化した図1・図4から知りえた点として、①全期間をつうじて江戸と大阪の白米価格はほぼパラレルに動いていること、②一般に、江戸の米価が大阪のそれを上まわっていること、③天保初期の物価急騰期には江戸の米価は大阪のそれを大きくこえ、20%近い開差が生じたが、その後開差は急速に縮まり、1840年代後半以降ほとんど開差がみられなくなっていること、を指摘しておくにとどめよう。

(b) 大 麦

大麦価格は、米価にくらべて変動幅が大きいという特徴をもっている。主食としては米に対して補助的な地位にある大麦の場合、その価格は平常年においては米の価格の半分にも達していないが、不作によって食糧農産物価格が騰貴すると、大麦価格は米価との開差を大幅に縮め、米価の70%~80%の水準まで上昇するのが常である。したがって、大麦価格は米価よりもはるかに大きな変動をしめすことになる。この点は表1をみれば明らかであるが、農林産物価格について個別商品ごとに期間平均・期間変動係数をしめした表4をみると、大麦価格の期間変動係数は、他の農林産物価格のそれにくらべて群を抜いた大きさとなっている。

そのほかに、表1および図4からは、①最後の年をのぞく全期間をつうじて、江戸価格と大阪価格はまったくパラレルに動き、大阪／江戸比は大きな変化をしめすことなくほぼ直線的に推移していること、②大麦については、江戸価格が大阪価格をこえていた他の農林産物と異なり、江戸価格と大阪価格は同じ水準にあったが、強いて言えば大阪価格のほうがほんの少しだけ高かったこと、の二点が注目されよう。いずれにしても、価格の短期変動が大きいにもかかわらず、江戸・大阪間の価格開差が $\pm 1\%$ 程度にとどまっていたことは、大麦価格の特異性をしめすものといえよう。

(c) 大豆

大豆価格は、表1・図2から知られるように、白米価格と大麦価格の中間的性格をもった動きをしめしている。

i 大豆の江戸価格と大阪価格は、大麦ほどでないにしても、ほぼ完全にパラレルな動きをみせている。したがって、大豆価格における大阪／江戸比の動きも、大麦価格にくらべれば多少の起伏をしめしているとはいえ、白米価格と比較すればはるかに直線的であったといつてよい。

ii 江戸・大阪間の価格開差についてみると、大麦に次いで開差が小さく、表4からも知られるように開差は $\pm 10\%$ 以内におさまっている。そして、大麦とは逆に、観察期間中の大部分の年では、江戸価格のほうが大阪価格を上まわっていた。その点では、大豆価格と白米価格はよく似ているといえよう。

iii 価格変動の振幅についてみると、白米・大麦・大豆の三者のなかでは、大豆価格の変動がもっとも小さい。この点は表4からも十分に確認できるところで、価格の期間変動係数は大豆がいちばん小さくなっている。そのなかで一つ注目されることは、1858—67年についての期間変動係数は、大麦の場合大阪のほうが大きいのに、大豆に関しては江戸のほうが大きい数値をしめしている点である。これは大豆価格の重要な特徴であるといつて差支えない。

(d) 繰 綿

工業原料農産物である繰綿の価格は、食糧農産物である白米・大麦・大豆の価格とはいささか様相を異にした動向をしめしている。表2・図3・図4から、この点を確認してみよう。

- i 江戸価格と大阪価格はほぼ平行に動いているが、食糧農産物にくらべれば、その度合は低い。1840年代がそのよい例である。この時期に江戸価格は一つの波動を描いているが、これに対して大阪価格は直線に近い動きであった。それ以外の時期でも、1835年前後・1860年前後に江戸価格と大阪価格との間の開差が広がっている。このために、繰綿価格における大阪／江戸比はかなり大きく波動することになるが、この点は、図4をみれば明らかであろう。しかも、この図4がしめしているように、繰綿価格の大阪／江戸比は、白米価格の場合とまったく逆の波動であったことが注目される。
- ii 全期間をつうじて、江戸価格が大阪価格を上まわっている。両者の間の開差は、全期間を平均してみれば、表4にみられるように、15～20%であった。食糧農産物の場合は、江戸価格と大阪価格の開差は±10%以内にとどまっているから、江戸・大阪両地間における比較的大きな価格開差の存在は、繰綿の場合の大きな特徴をなしているといえよう。
- iii 江戸価格と大阪価格の間の開差は全期間をつうじて一定であったわけではなく、1830年代の物価上昇期には開差が縮小し、逆に1840年代の物価上昇期には開差が拡大する傾向をしめしている。図4をみると、繰綿価格における大阪／江戸比の動きは、白米価格の場合とは対称的であり、繰綿価格における開差が縮小（拡大）しているときは、白米価格における開差は拡大（縮小）している。きわめて興味ぶかい観察事実であるといわなければならない。
- iv 1830年から1867年までの間に、いずれの農産物価格も2つの波動と最後の数年間における急騰局面を経験しているが、繰綿価格と食糧農産物価格

とでは、波動の山や谷の時期にズレがみられるほか、波動の波型にも異なっていた点がみとめられる。たとえば、1840年代から50年代にかけて、食糧農産物価格はなだらかな上昇局面をむかえているのに、繰綿の江戸価格はゆるやかな下降、大阪価格は横ばい傾向がみられるのである。

- v 表4をみると、繰綿価格の期間変動係数は白米・大麦よりはるかに低く、大豆価格の場合とほとんど変わらない。したがって、繰綿価格の変動は、一般に食糧農産物価格の変動より小さいものであったといえる。

(e) 蠟

林産物である蠟は、上で検討した4つの農産物とは性格を異にする商品であるから、その価格の動きも当然違ったものになる。

- i 蠟価格の場合も、観察期間をつうじて2つの波動と1つの上昇局面がみられる。しかし、波動における山や谷の時期は、上の4つの農産物より数年遅れて訪れている。また、1850年代後期以降の物価急騰期における価格上昇率は、農産物のそれよりはるかに低くなっている。これらの点からみると、蠟は農産物より工産物に近い価格変動をしめていたといえよう。
- ii 江戸価格はつねに大阪価格を上まわっており、その開差は表2・表4にみられるように大体において10～20%であった。この開差は、繰綿の場合の開差とほとんど同じ程度である。
- iii 蠟価格の大阪／江戸比の動きをみると、図5から明らかなように、それほど大きな起伏をとまわずに推移している。その点では、大麦をのぞく農産物や後述の味噌・醤油・清酒といった食料工産物とは明らかに異なっており、むしろ黒砂糖や種油と同じ様相をしめしていたといえてよい。

以上、5種の農林産物の江戸と大阪における価格動向について、商品毎に個別に検討してきた。これら5種の商品の価格は、1830年から1867年までの間に2つの波動と1つの急騰局面を経験している点において、まったく異なるところはないが、そのほかの点では、商品によってかなりの相違がみられることが明白となった。それらの検討から導きうる観察事実は次のようなものである。

(1) 全般的にみて、江戸価格の水準は大阪価格の水準を上まわっているが、白米・大麦・大豆という食糧農産物の場合は、江戸と大阪の価格開差が非常に小さいのに対して、繰綿という工業原料農産物や蠟のような林産物については、江戸・大阪間で15~20%の価格開差が存在している。また、江戸・大阪間の価格開差がきわめて小さい食糧農産物の場合でも、大麦は江戸価格と大阪価格がほとんど同じであったのに対して、白米については江戸価格が大阪価格を上まわることが多かったから、白米に対する大麦の相対価格は、江戸のほうが低いことになる。この点は注目に価しよう。

(2) 全期間をつうじて、すべての農林産物の江戸価格と大阪価格にほとんどつねに同じ方向に動いている。しかし、商品によって江戸価格と大阪価格の変動率に違いがあり、その結果、価格の大阪／江戸比の動きも商品毎に異なっている。その場合、大別して、大阪／江戸比が大きな変動をしめさずに推移するものと、そうでないものとに分れる。前者には大麦・大豆・蠟が属し、後者には白米・繰綿が含まれる。しかも、後者については、白米価格の大阪／江戸比と繰綿価格のそれはまったく対称的な動きをしめしている点が注目される。

(3) 大阪／江戸比の長期的趨勢が1845年前後を画期として転換をしめすという点については、農産物に関するかぎり認めることは困難であるが、蠟という林産物ではかなり明瞭に看取できる。蠟価格の大阪／江戸比は、1845年頃まで傾向的低落をしめした後、多少の起伏をともないながら横ばいに転じているのである。

(4) 大阪物価の市況への感応度の高さと江戸物価の下方硬直性という問題は、農林産物については、ほとんど認められない。

II 工産物（種油・黒砂糖・味噌・醤油・清酒）価格の動向

ここで取扱われる工産物は5種であるが、そのうち4種までが食料工産物である。工産物の構成に偏りがあることは否めないが、以下、表2・3および図5~9にしたがって、個別に検討していこう。

表5 工産物価格の期間平均・期間変動係数

(指数, 1840—44年 江戸=100)

	期 間	平 均			変 動 係 数	
		江 戸	大 阪	阪/江	江 戸	大 阪
種 油	1830—43	94.3	80.9	85.8	20.2	18.2
	44—57	102.4	92.5	90.3	9.9	11.6
	30—57	98.3	86.7	88.2	16.1	16.3
	58—67	176.5	158.3	89.7	40.8	37.5
黒 砂 糖	1830—43	107.3	92.1	85.8	20.4	25.2
	44—57	101.2	85.1	84.1	10.3	12.6
	30—57	104.2	88.6	85.0	16.7	20.8
	58—67	150.6	141.8	94.2	35.0	43.8
味 噌	1830—43	95.1	120.1	126.3	21.3	20.3
	44—57	101.1	124.1	122.7	7.5	8.8
	30—57	98.1	122.1	124.5	15.9	15.5
	58—67	156.3	297.2	190.1	40.4	64.9
醬 油	1830—43	94.7	95.3	100.6	17.2	15.0
	44—57	106.0	79.9	75.3	4.6	5.9
	30—57	100.4	87.6	87.3	13.3	15.0
	58—67	149.1	167.7	112.5	26.4	57.6
清 酒	1830—43	113.7	86.8	76.3	28.9	25.7
	44—57	134.6	82.3	81.1	8.7	17.7
	30—57	124.2	84.5	68.0	21.6	22.4
	58—67	198.0	168.1	84.9	42.4	67.2

図6 江戸・大阪における種油価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)

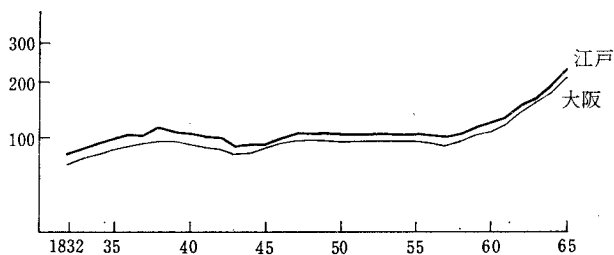


図7 江戸・大阪における味噌価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)

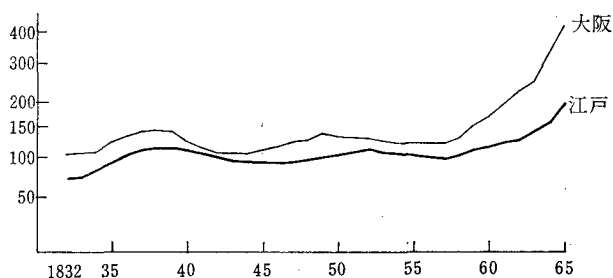
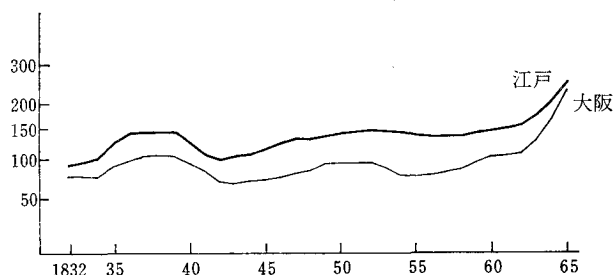


図8 江戸・大阪における清酒価格の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)



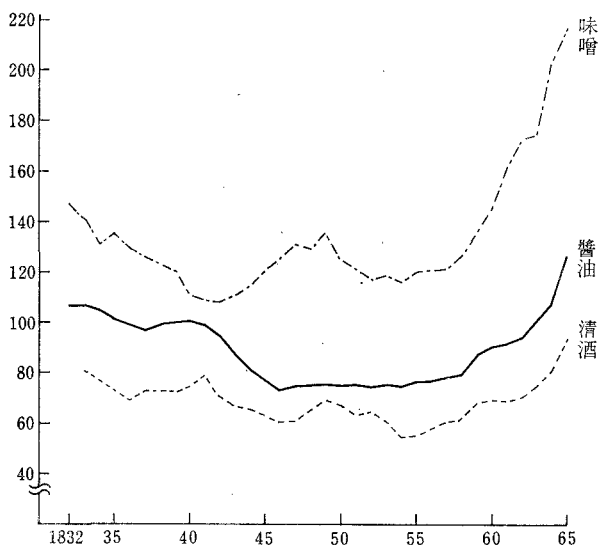
(f) 種 油

非食料工産物である種油は、当然のことながら、農林産物とは違った価格動向をしめしている。

- i 江戸価格はつねに大阪価格を上まわっており、両者の開差は大体において10～15%であった。その開差は、白米・大麦・大豆のような食糧農産物にくらべればかなり大きいといえるが、繰綿・蠟よりはむしろ小さいものであった。
- ii 江戸・大阪間価格開差の年による変動は大きくなく、大阪／江戸比は85から92までの間で推移し、それほど大きな変動をしめしていない。しかし、大阪／江戸比の長期的趨勢は、それほど明瞭な形をとっていないとはいえ、1845年前後をさかいにして転換している。

図9 味噌・醤油・清酒価格における大阪／江戸比の動向

(指数, 1840—44年 江戸=100, 5カ年移動平均)



- iii 工産物価格の期間平均・変動係数をしめした表5から知られるように、種油価格の短期変動は食糧農産物のそれよりはるかに小さく、また繰綿や蠟とくらべても、僅かではあるが小さくなっている。一般に工産物価格の変動幅は農産物価格のそれより小さいものであるが、江戸と大阪の種油価格の動きからもこの点は十分に確認できるといえよう。ところで、種油価格について江戸と大阪の期間変動係数を比較すると、1830—43年については江戸のほうが大きく、1844—57年の場合は逆に大阪のほうが大きい。これは、黒砂糖を別にすれば、工産物価格に共通してみられる特徴である。

(g) 黒砂糖

黒砂糖の産地はいうまでもなく琉球や大島であり、薩摩を経て大阪や江戸へ積送されたものである。その価格の動向は、種油価格とも、また味噌・醤油・清酒という食料工産物とも違ったものとなっている。

6 拙著『近世の物価と経済発展——前工業化社会への数量的接近——』(昭和53年) 113ページ。

- i 最後の年をのぞけば、黒砂糖の江戸価格は全期間をつうじて大阪価格を上まわっている。その開差はかなり大きく変動しており、大きいときには25%に達し、小さいときは0%であった。種油価格とくらべてみると、江戸・大阪間の価格開差は黒砂糖のほうが種油よりはるかに大きく、したがって、黒砂糖価格の大阪／江戸比の変動幅も黒砂糖のほうが大きくなっている。
- ii 1860年代の物価急騰期をむかえると、大阪価格の上昇率は江戸価格のそれを大きく上まわって、江戸・大阪間の価格開差は急速に縮まり、ついに1865年には大阪価格が江戸価格をこえるにいたっている。この点も、種油価格の動きと対照的である。
- iii 大阪／江戸比の長期的趨勢に関しては、かなり明瞭に1845年頃を画期として転換がみられる。すなわち、1845年前後まで黒砂糖価格の大阪／江戸比は低下傾向にあったが、45年以降波動をふくらみつつも傾向としては上昇に転じている。

(h) 味噌

以下で取り上げる味噌・醤油・清酒はいずれも食料工産物であるが、それぞれ性格を異にしている。味噌の種類はきわめて多様であり、生産・消費ともに地域性が強い。その対極にあるのは清酒で、灘をはじめ特定産地への集中度が非常に高い。醤油はその中間にあって、種類も関西の淡口、関東の濃口に二分され、それぞれの特産地が成立している。したがって、これら3種の商品の価格は、違った動きをしめすことになる。なお、味噌・醤油・清酒については大阪の価格データが得られないため、ダミーとして京都の価格データを用いているが、白米の項ですでに述べたように、1860年代の京都価格は江戸価格にくらべて異常な騰貴をしめし、その結果、価格の大阪（京都）／江戸比の動きが大阪の価格データを用いた他の商品の場合と不整合になるので、1860年代に関しては考慮の外におかざるをえない。

味噌価格の動きについての観察事実、次のようなものである。

- i 大阪価格が一貫して江戸価格をかなり上まわっている。表5にしめされた味噌価格の期間平均によると、1858—67年をのぞけば、大阪価格は江戸価格より25%前後高い水準にあったことが判明する。味噌以外の9種の商品は、江戸価格が大阪価格を上まわるか、あるいはほとんど同水準であった。その意味で、味噌価格はきわめて特異であったといえよう。
- ii 味噌価格の場合も観察期間をつうじて波動がみられるが、江戸と大阪における波動の山や谷の時期に1～2年のズレがあり、しかも価格の変動幅が両地間でかなり異なっているため、図9から知りうるように、味噌価格の大阪／江戸比は大きく変動している。江戸時代末期の数年間については留保するとしても、1830年代における大阪／江戸比の低落は、他の食料工業物とはくらべものにならないほど急激であった。さらに、1840年代前期にかけては、大阪／江戸比がきわめて安定的であった醤油価格に対しては勿論のこと、大阪／江戸比に波動がみられる清酒価格と比較しても、味噌価格の大阪／江戸比の変動幅は大きなものであった。
- iii 大阪／江戸比が大きく動いているにもかかわらず、味噌価格の短期変動は、かならずしも大きくはなかった。表5によると、1858—67年は別にして、1830—57年に関しては、味噌価格の期間変動係数は5種の工業物中醤油に次いで小さいものであった。

(i) 醤油

江戸の越後屋呉服店が購入していた醤油が、淡口であるか、濃口であるかは定かとはいえない。清酒はともかく、醤油まで上方から淡口醤油を取り寄せていたとは考えられないから、関東産の濃口醤油を使っていたと思われる。醤油価格についての観察事実、次のとおりである。

- i 1830年代前期と1863年以降をのぞけば、江戸価格はつねに大阪価格を上まわっていた。その開差は最大で25%に達しているが、1835年にはほとんど開差がみられなかったのであるから、醤油価格における大阪／江戸比の変動幅も当然大きなものとなっている。

- ii 観察期間の初めから継続的低下をしめていた醤油価格の大阪／江戸比は、1846年に底に達し、それ以後1850年代の末まではほぼ横ばい状態が続けている。醤油価格の長期的趨勢は、明らかに1845年頃をさかいにして転換しているといつてよい。
- iii 表3から知られるように、醤油の江戸価格は1830年代の物価急騰期に大阪価格を上まわる上昇をしめし、このことが大阪／江戸比の低下をまねいたのであるが、1840年代をむかえ物価低落期にはいっても、江戸価格は下方硬直的で大阪価格ほど低落をしめさないで、大阪／江戸比は大幅に落ち込むことになった。しかし、それ以後は江戸価格・大阪価格とも、他の諸物価に比して変動が小さく、安定的であった。この点については、表5にしめされた醤油価格の期間変動係数をみれば明白であろう。

(j) 清 酒

清酒は、味噌や醤油とは異なり、灘などの特産地から積下された全国の商品である。清酒価格に関する観察事実、次にしめすとおりである。

- i 清酒の江戸・大阪間価格開差は全商品中もっとも大きく、表5にしめされているように、1830—57年の平均で32%、1844—57年の平均では実に40%ちかく、江戸価格が大阪格価を上まわっている。
- ii 物価上昇期には清酒の江戸・大阪間価格開差が拡大して、清酒価格の大阪／江戸比は低下するが、物価低落期になると、反対に価格開差が縮小して、大阪／江戸比は上昇している。物価上昇期における江戸価格の上昇率が大阪価格のそれを上まわり、逆に物価低落期には江戸価格が下方硬直的で大阪価格ほど低落しなかったことが、このような関係をもたらしただのである。そして、清酒価格においては、この点がもっとも明瞭にあらわれているといえる。
- iii 清酒価格の短期変動は、表5の期間変動係数から明らかなように、工産物価格のなかでもっとも大きかった。清酒の場合、原料価格と製品価格の連動性が強く、両者の価格変動の間にそれほどの開きが見られないのが常

であった。⁷ 清酒価格の期間変動係数の高さは、この点から理解されねばならない。

以上、5種の工産物の江戸と大阪における価格動向について、商品毎に個別に検討してきた。工産物価格の場合も、1830年から1867年までの間に、2つの波動と1つの急騰局面を経験している点では、農林産物価格の場合とまったく変わらない。その他の観察事実を整理すると、次のようになる。

(1) 味噌を例外として、他の工産物については、江戸価格が大阪価格をかなり上まわっており、その開差は農林産物の比ではない。さらに、西日本に特産地がある全国の商品ほど両地間の価格開差は大きく、江戸価格が大阪価格を大幅にこえている。

(2) 5種の工産物に共通する特徴として、1830年代の物価上昇期に江戸価格が大阪価格をこえる上昇率をしめたことが指摘できる。農林産物の場合は、この点が明瞭な形をしめていないのみか、時として逆の結果が生じている。

(3) 工産物価格における大阪／江戸比の動きについては、二つのグループに大別される。一つは大阪／江戸比がそれほど大きく変動しないもので、種油や黒砂糖がこれに属する。他は大阪／江戸比の変動幅が大きいもので、味噌・醤油・清酒のような食料工産物がこれにあたる。

(4) 工産物価格に関しては、大阪／江戸比の長期的趨勢が1845年前後を画期として転換したという事実を、一般的傾向として認めることが可能である。しかし、商品によっては、清酒のようにこの転換が明瞭でない場合もある。

(5) 味噌・醤油・清酒の1860年代における大阪価格については、すでに指摘したように問題があり、ここでしめた系列をそのままの形で受け入れることはできないが、50年代末から、工産物の大阪価格が江戸価格に対して相対的に上昇していることは否定できない。

7 拙著『近世の物価と経済発展』144—45ページ。

お わ り に

以上、10種の個別商品について、1830—67年における江戸・大阪価格の動向を検討してきた。その結果、前二稿で得られた観察事実がほぼ確認できたほか、次のようないくつかの注目すべき観察事実を得ることができた。

(1) 全期間をつうじて江戸価格と大阪価格にほとんど差がなかった大麦と、大阪価格が江戸価格を大きくこえていた味噌以外は、いずれも江戸価格が大阪価格を上まわっている。その開差は、一般に工産物のほうが農林産物より大きい、同時に農林産物・工産物を問わず、西日本に特産地のある全国の商品のほうが、そうでないものより価格開差が大きくなっている。

(2) 価格の大阪／江戸比が全期間をつうじてあまり変動しないものと、大きく変動するものとに大別されるが、前者には大麦・大豆・蠟・種油・黒砂糖がふくまれ、後者には白米・繰綿・味噌・醤油・清酒が属している。そして、後者では白米と繰綿が対称的な動きをしめしている。

(3) 工産物価格は、商品毎に多少の違いが認められるとはいえ、一般に1830年代および40年代前期において、江戸価格は大阪価格に対して相対的に上昇をしめしている。いいかえれば、1830年代の物価上昇期において江戸価格は大阪価格以上に騰貴し、またそれに続く物価下落期には江戸価格が下方硬直的な動きをしめしているのである。

これらの観察事実のインプリケーションについて論ずることが次の課題となるが、それについては別稿に譲らねばならない。